

県予選決勝

決勝戦は充実した試合で、前半5分ウイングカ石君のコーナーキックより相手のミスによってまず1点を先取り、尚も再三のチャンスをあと一步のところで点にすることができず、断然優勢のまま前半を終えた。

後半に入ってから本校の優勢は依然として続いたが、30分ごろ相手にペナルティーキックを許し、1-1の同点とされた。こうなると追われる者の弱みか、しばしピンチに見舞われたが、バックは堅く、後半を終わり、同点のまま延長戦に入った。

延長戦に入り、本校はフォワード白井君がシュートを決め、劣勢をくつがえし、さらに浅倉、白井君のシュートで、4対1のスコアで栄光学園を倒した。

決勝までの道のり

決勝に進むまでを振り返ると、まず、1回戦シード、2回戦翠嵐高校を8-0、3回戦関東学院高校を3-0と一方的に下し、4回戦では優勝確実と賞されていた慶応高校に対し、前半から1点のリードを許し、後半を終わるのかと思われた矢先に、白井君のシュートで同点とし、続いて早野君の見事なロングシュートで2点目をあげ、見事、慶応高校を振り切り、茅ヶ崎高校との抽選で勝った栄光学園と決勝を行ったのである。

9年ぶり4度目

本校の全国大会出場は4度目、実に9年ぶりの事である。26年には決勝戦まで進み、惜敗している。

松山北高と1回戦第2試合を行い、両校得点なく、延長前半の一点リードされたのを、後半葛野君が1点を挙げ、同点としたが抽選で敗れた。慶応高を破った実力を発揮できないのが惜まれる。

思い出

葛野泰男

38年経っても

38年経っても思い出は蘇ります。機関誌「サッカー」を貪り、ソ連だ、ドイツだと練習法を工夫していたからこそ、クラマーサッカーがすんなり我々の中に入り込んだのだと思います。

身体的素質には欠けていたとしても、「全知全能」を使う精神的素質に長けていたからこそ結果がついてきたのだと我田引水します。だからこそ、我々素人集団（殆どが高校からサッカー開始）も成就感が味わえ、今も胸が張れるのだろうと。

サッカー指導者を志したのも3年夏以降でした。「先輩にしごかれたから強くなった」ではなく、「自ら欲したから強くなった」と思わせる指導に向けて。

小田高3年間の達成感を伝えたい

横浜南高 23年間の指導は、最新の戦術を編み出し、意欲に応じて戦術と将来のスポーツライフづくりを描かせる努力をしました。原点は「小田高3年間の達成感を巧く伝えたい」の一念であったと記憶します。